

第2回浮体式洋上風力発電の海上施工等に関する官民WG
(議事概要)

日時 令和7年3月7日(金) 13:30~14:35

場所 オンライン (teams)

1. 浮体式洋上風力発電を巡る最近の動向について、事務局及び浮体式洋上風力建設システム技術研究組合 (FLOWCON) より説明を行った。
2. 浮体式洋上風力発電の海上施工シナリオおよび海上施工に関する調査・研究方針について、事務局より説明を行った。

3. 意見交換において、以下のような議論があった。

○検討すべき点や項目がしっかりまとまったと思う。洋上風力は、5~10年で整備して終わりという話ではなく、この先の15~20年以上、維持管理や新たな整備が発生し、それぞれの事業での利用が重複することになるので、その前提で、港湾同士のネットワークをどうするかについても検討が必要ではないか。

⇒(事務局) 今国会に提出している港湾法等の一部を改正する法律案において、基地港湾の一時利用の調整を円滑に行うための協議会制度の創設を盛り込んでいる。ご指摘の観点を踏まえながら対応できるように進めていきたい。

○前回の議論に比べ、施工シナリオの係数が絞り込まれてきた印象である。今後、港湾区域内外での水域面積や適地の選定等、候補地を絞り込んでいくことが必要ではないか。また、シナリオのケース別に、コストや工期等の比較検討も行う必要がある。

⇒(事務局) 今回は、具体の海域等を示すには至らなかったが、来年度以降の検討においてご指摘の観点を踏まえながら検討していきたい。

○設備の部材について、国内調達が大前提だと考える一方、政策的な是非は分らないが、隣国で製作するのも選択肢の一つになるのではないか。

⇒(事務局) 政府としては、国内調達比率目標も掲げているところであり、まずはそれを前提として、関係省庁と連携した取組を進めていきたい。

○海上施工の効率化の大きな目的として、コスト削減がある。今回の施工シナリオは、全体を俯瞰し、どこに課題があるかを特定する上で必要な整理がされている。今後シナリオを精緻化すると、課題も細分化されてくるが、シナリオのバリエーションは増やしすぎず、全体を俯瞰的に見る観点は維持していくべき。

⇒(事務局) 今回お示しした施工シナリオを基本として、議論を継続していきたい。

○アンケートで作業限界に関する内容が含まれていたが、優れた先行事例に学んでキャッチアップすることも大事ではないか。所属する大学の若手教員に、ヨーロッパの事例として、作業船のAISの時系列データと、その時の海象気象条件を突き合わせて、作業船がどのような動きをしていたかを調べてもらったところ、有義波高は2.0～2.5m、作業が始まると24時間制で作業をしていたようである。欧州のSOV設計者に取材したところ、有義波高2.5m、24時間3交代に対応可能な設計仕様ということであった。アコモデーション（宿泊）の環境も大事。

⇒（事務局）「洋上風力関係船舶確保のあり方に関する検討会」の活動に反映していきたい。

○コスト全体を下げる上で、合理化を進めていく必要がある。単に工場や作業船の数を増やすだけでは合理化に結びつかないので、小品種の大量生産に着目した自動化といった日本独自の工夫を取り入れていく必要があるのではないか。

○コンクリート製浮体と鋼製浮体では対応が変わってくるが、コンクリート製の維持管理手法の検討をどのように行っていくのか。

⇒（事務局）取組方針に基づき、設計・施工・維持管理に係るガイドラインの検討を来年度以降進めていきたい。コンクリート製浮体について取り組まれている事業者からのお話も伺っており、各社の検討も踏まえながら検討を進めたい。

○今回シナリオが6ケース示されているが、今後、優先順位をつけて検討していくのか、6ケース全てに対応して検討していくのか。また、評価を行う際の評価の観点として、経済性、サプライチェーン確保の確実性、政府目標達成への貢献度等が考えられるが、何を重視するのか。

⇒（事務局）今回提示したシナリオを、直ちに集約して絞り込みを行っていくことまでは考えていないが、資料3のP18、19に、比較検討におけるポイントを記載しており、ご提示いただいたような観点を総合的に考えていく必要がある。

○船舶に求められるスペックに関して、黒海と日本では波形勾配が異なるので、その点の考慮が必要ではないか。

⇒（事務局）有義波高や有義波周期等、日本周辺の海域特性を踏まえて「洋上風力関係船舶確保のあり方に関する検討会」において検討していきたい。

以上